

# たのしい たのしい 船穂校 ♪

倉敷市立船穂小学校

## 船穂の倉敷物語

江戸時代、玉島・船穂地区は備中松山藩領で、『一輪の綿花から始まる倉敷物語』の構成文化財として、一の口水門、玉島町並み保存地区、旧柚木家住宅が取り上げられている。玉島地区は、松山藩によって干潟が干拓され、玉島港は、米や麦、綿、こんにやくなどの備中地区の物資の集散地として繁栄した。そして、高瀬通しの水運は、備中高梁と玉島港をつなぐ重要な物流ルートだった。陸路は、玉島往来と呼ばれ、長尾から穂井田、菌、総社市新本、総社市下倉を通り、総社市美袋に達する。

綿について言えば、備中綿を材料に船穂・長尾地区では足袋が中小の工場で作られていたし、倉敷紡績玉島工場が明治期に建てられている。い草は、江戸時代初頭までは、全国的には備後表が有名で、広島県芦田川流域を主な産地としていた。玉島・船穂地区のい草栽培はこれを導入したもので、帯江・豊洲・茶屋町地区のい草栽培よりも歴史が古い。校歌に『い草を渡る 青い風』とあるように、昭和30年代までは船穂でも広く栽培されていた。

高瀬通しは、高梁川（現在の柳井原貯水池）から、船穂、長尾、上成を通過して玉島港につながる水路（運河）である。船穂地区には、一の口水門、二の口水門、又串水門の遺構がある。高瀬通しは、これらの水門の開閉によって水位を上下させて舟を遡上させる閘門式運河で、パナマ運河と同じ形式である。職員室前に掲示してある図面は、十年ほど前、水島地区の工場を退職した技師さんたちが、これらの水門を測量調査した結果をまとめたものである。古文書には、複数の水門の開閉により水位を変えていたと記述されているが、又串水門を調査した結果、水位の変化は、水門の中だけで行われていたと主張している。水門の中だけで水位を変えられれば、短時間で遡上できるし、水位の変化が下流域に及ぼす影響も少なくすむ。測量による裏付けもある信頼性のある資料だと思うが、文献に記されていないので未だに採用されてはいない。

船穂は、古地図には、『舟尾』と記されている。水口、それぞれの水門に舟だまりが設けられていたから、『舟尾』とは、舟をつなぐ場所、舟だまりといった意味のようだ。その後、字画の多い船の方がよかろうとか、尾よりも実りのよさを感じさせる穂のほうがよかろうとかいう理由で、『船穂』と表記されるようになったのではないか。

船穂地区は、又串、一の丁、鳥向、中新田、福島などの高梁川に沿った平坦地と、北谷、前谷、平石、鶏尾などの丘陵地で構成されている。平坦地では稲作が行われ、丘陵地では施設園芸が行われている。『一輪の綿花から始まる倉敷物語』のストーリーとして船穂の歴史と現在を見つめた時、高瀬通しと綿花によって、船穂は倉敷と一つにくることができる。

船穂のマスカットとスイートピーは、倉敷物語を彩る『倉敷市』の色であり香りであり味であると言えるのではないか。

